

京の雅 近現代社会の創出

⑩ 高木博志
(日本近代史)

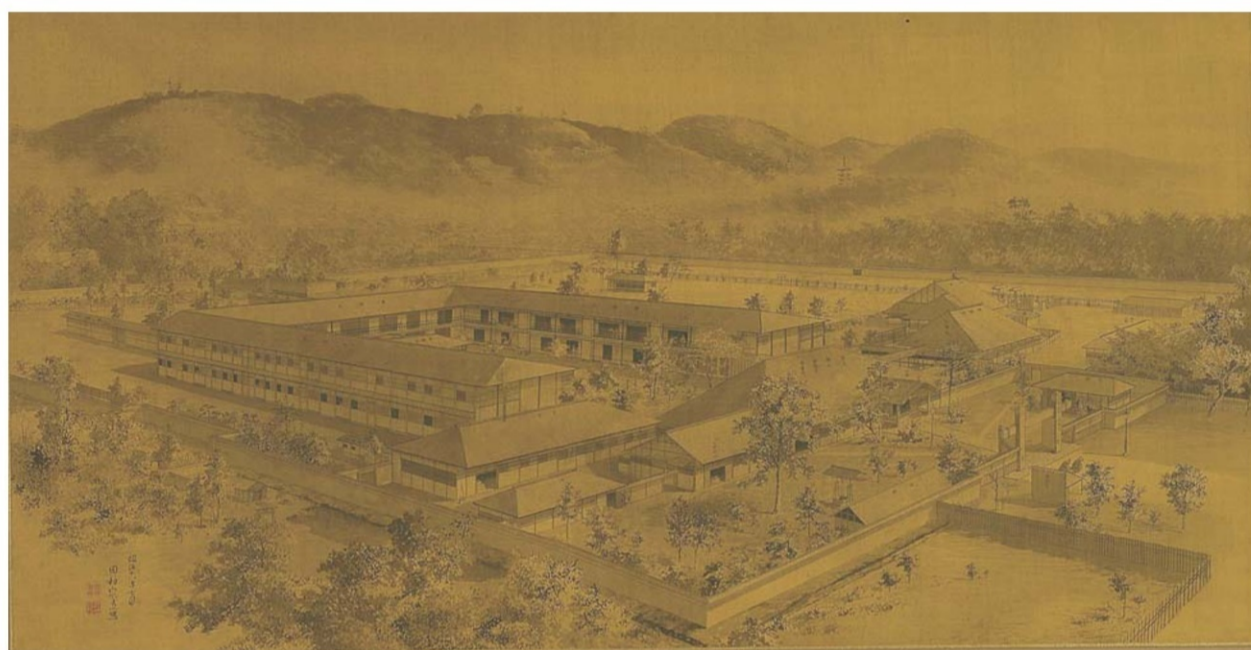


たかぎひろし 1959年大阪府吹田市生まれ。立命館大学大学院修士課程修了後、北海道大学文学部を経て京都大学人文科学研究所教授。著書に「近代天皇制と京都」「京都の歴史を歩く」「近代天皇制と社会」などがある。

京大人文研 90年の学知

ところで昨今、祇園町南側は「もてなしの文化」の典型として、過剰な外国人観光客をよび寄せも生じるほどである。しかし四条通南側の花見小路は、明治期には祇園の外れ、周縁であった。「都をどり」の舞台、祇園甲部歌舞練場の場所には、かつて定期的な京都の娼妓が梅毒検査を行っていた。穢れ時には隔離される駆黴院があった。早く駆黴院から出たいと、娼妓たちの悲痛な祈りが史料に残されている。

2019年9月のICOM(国際博物館会議)京都大会のオープニングで、祇園甲部・宮川町・先斗町の芸舞妓の踊りが「もてなしの文化」として披露されたが、ツイッター上で、「セレモニーで挨拶するのはほぼオッサンで、おもてなしするのは女性だけって強烈な違和感だなあ」との意見が、共感をもって広がった。まさに京都観光の本質を突いている。



祇園甲部歌舞練場以前にあった京都駆黴院を描いた田村宗立作「京都駆黴院図」(1885年) 京都国立近代美術館所蔵、Photo: The National Museum of Modern Art, Kyoto

明治期に駆黴院があった花見小路界隈。京都の歴史や文化には、常に光と影がともなう (京都市東山区)

歴史に光と影 花街に駆黴院



「統」として定着するのは、大正期以降である。そして駆黴院(のちの洛東病院)は、鳥部野に隣接する東山五条に移り、竹久夢二と京都に住んだ恋人彦乃も、1918年に同院に結核で隔離された。

1956年に制定された売春防止法までの京都観光は、本山参りの後に花街で遊ぶ男性中心の性格が強かった。たとえば明治末から大正期の奈良女子高等師範学校(現・奈良女子大学)の修学旅行の記録を見ると、女子学生の宿泊のために三条大橋西詰めの旅館を、早くより予約して借り切り、大部屋に泊まる男性旅行者を閉め出した。

そして彼女たちが古典の京都らしさを求めてまわるのが、嵯峨や宇治である。しかし嵯峨が、今日の京都観光につながる女性性を体現する

る、古典文学の祇王・祇女・横笛らの名所に転換してゆくのも、20世紀である。岡崎で1895年に平安神宮が造営される第4回内閣博覧会の開催と同時に、嵯峨でも観光への動きが胎動し、1902年に祇王寺が北垣国道元京都府知事の別荘を本堂として、富岡鉄斎や京都日出新聞記者・金亨静枝ら文化人や地元運動家がいまわって復興する。そして平等院鳳凰堂が「国風文化」というピュアな日本文化の象徴となり、宇治が平家物語の戦乱の場から源氏物語の雅な場へとイメージを転換するのも、20世紀のナシヨナリズムと深く関わっている。

「日本文化を創り出した京都」は、「おもてなしの文化」、雅な貴族文化などとバラ色に表象され、それらは文化庁移転のうたい文句にもなる。しかしすでに述べてきたように、こうした京都イメージは、近現代を通じて、政治的、社会的に創り出された側面が強い。

現在、人文科学研究所では、共同研究「近代京都と文化」を行っている。京都の歴史や文化には、常に光と影がともなうものであり、複眼的に見てゆくことが必要と考えている。したがって花街の性・差別の問題といった周縁性や民衆の生活も視野に入れていく。かつて人文科学研究所の日本史研究者・林屋辰三郎は、「地方・部落・女性」の三つの視点で、民衆の生活を明らかにするよりどころになると論じたが、そうした思想を大切にしていきたい。

(寄稿)